

新資料 DHARMAPADA の基礎研究 I

並 川 孝 儀

はじめに

近年、Rāhula Collection (The Bihar Research Society 所蔵, Patna) と呼称されるチベット將來の数多くの写本中より、法句經の写本が二人の学者によって相次いで校訂出版された。

“THE BUDDHIST HYBRID SANSKRIT DHARMAPADA”

N. S. SHUKLA, Tibetan Sanskrit Works Series (TSWS) No. XIX Patna, 1979.

“Text of the Patna Dharmapada”

G. ROTH, *the Language of the Earliest Buddhist Tradition*, pp. 78—135, Die Sprache der ältesten Buddhistischen Überlieferung, Göttingen, 1980.

前者は TSWS. の第19冊目として、後者は Particular Features of the Language of the Ārya-Mahāsāṃghika-Lokottaravādins and their Importance for Early Buddhist Tradition と題する論文において公表された。同一写本からのこの二種の校訂出版は、Dhammapada, Gāndhārī Dharmapada, Udānavarga の各本に依っていた従来の法句經研究に一つの新しい光を投げかける資料として注目すべきである。

校訂に用いられた写本は Proto-Bengali 文字で書写され、11世紀頃のものとして推定されている。現存写本は22章 (Shukla 版全414偈, Roth 版415偈) より構成されているが、Colophon に依れば本来全502偈より成った Dharmapada と記述されていることからすると、現存写本は90偈近く欠落したものと言える。

上記の両版は、校訂者である Shukla 氏も難解なることを告白しているように、判別の不明瞭な文字や随所に見られる特異な語形の故にか、同一写本からの校訂にしては著しい差異が存在している。また、校訂者自身でも読解不可能と思える部分や、校訂上の明らかな基本的誤謬も少なくない。偈の構成についても、Shukla 版が総数を 414 偈と数えるのに対して Roth 版が415偈とする点からも象徴されるように、随所に相違が見られる。つまり両版は残念ながら、完全な校訂本と評するのは不十分であると言わざるを得ない。そこで、本テキストの研究は先ず両版を比較し、文献批判研究によってより満足しうるテキストの確立を目指すことから始め

新資料 DHARMAPADA の基礎研究 I

なければならない。本論文は Dhammapada 等の異本類を中心としたパラレルを比較対照させ、両版の校訂上の問題を主とした基礎的作業を行なうことを目的とする。紙数の都合上、今回は 1 から Shukla 版 260 (Roth 版 261) までのいくつかの代表例を選び、主要な問題点に絞って考察を加える。尚、本テキストの特質や、構成上或いは言語・文法上の諸問題についての詳論は他に譲る。(仏教史学研究第 24 卷 2 号、近刊)

略号

パーリ原典は特記のない限り PTS 版を用いるが、それ以外の版を参照する時は、テキスト名の前に B^e (=ビルマ第六結集版) 及び S^e (=ジャム王室版) を付して表記する。

S= 前記 Shukla 版

R= 同 Roth 版

Dhp= *Dhammapada*, PTS. new ed., by S. Sumaṅgala Thera, 1914.

G Dhp= *The Gāndhāri Dharmapada*, edited with an Introduction and Commentary by John Brough, London Oriental Series, vol. 7 (Oxford University Press, 1962)

Uv= *Udānavarga*, herausgegeben von Franz Bernhard, 2 Bände. Sanskrit texte aus den Turfanfunden X. Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen. Philologisch-Historische Klasse, Dritte Folge, Nr. 54. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, 1965 & 1968.

—Pāli Text.

DN= Dīgha-Nikāya

MN= Majjhima-Nikāya

SN= Saṃyutta-Nikāya

AN= Aṅguttara-Nikāya

Ud= Udāna

It= Itivuttaka

Sn= Suttanipāta

Pv= Petavatthu

Th= Theragāthā

Thī= Therīgāthā

Jā= Jātaka

Mil= Milindapañha

Vin= Vinaya

—other works.

BHS D= F. Edgerton, Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary.

BHS G= F. Edgerton, Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar.

CDIAL= R. L. Tunner, Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages.

尚、その他の略号等は A Critical Pāli Dictionary *epilegomena to vol. I*, Copenhagen, 1948. に準拠する。

凡例

- (1) 先ず、各偈の番号を表示。但し、偶数に両版で相違がある場合、各々の番号を並記。次いでS版を左側に、R版を右側に挙げるが、両版での校訂上の相違部分をイタリックスによって示す。原文は一切両校訂の通りに示した。(S版の *errata* は訂正済)
- (2) 次に、パラレル(P)を列挙する。P~P₂には、両版、及びUv等で既出のパラレルを纏め一部訂正を加えた。Pには異本類(Dhp, Uv, G Dhp)での全同偈、P₁は他文献中の全同偈、そしてP₂は部分的なパラレルを示す。P₃では両版 *note* 中には未指摘の新出パラレルを挙げる。パラレルは原則としてニカーヤ類にとどめ、かつ特にP₃に関しては代表的な例のみにとどめたものもある。いずれ、網羅的なパラレル表を改めて発表したい。
- (3) 本文では、註釈研究を加えた後に邦訳を試みるが、訳出は、原則的にDhp, G Dhp, Uvに見出せない偈のみに限定する。また、紙面の都合上、両版における細部な差異についての検討は省いたものもある。

※-1 本文中、両版の校訂上の問題を論証する際“パラレルより支持される”という表現を用いる場合も多いが、両校訂者によって、既に単なる機械的ローマナイズ化ではなく、パラレルとの校合が施されるとするなら、それは不適切な証明方法かも知れない。しかしながら、校訂の吟味には、便宜上パラレルとの比較研究は不可欠であり、このような表現を使用した。

※-2 本論は、法句経類の成立史的研究を目的とはしていないため、原則的に漢訳、及びチベット訳等の異本類には論究しなかった。

12・13 (I—12, 13)

<p>12. chandadoṣabhayā mohā / yo dhammaṃ ativattati / nīhīrate tassa yaśo / kālapakkhe va candramā //</p>	<p>chanda-doṣa-bhayā mohā yo dhammaṃ abhivattati nīhīrate tassa yaśo kāla-pakkhe va candramā.</p>
<p>13. chandadoṣabhayā mohā^h / yo dhammaṃ nātivattati / āpūrate tassa yaśo / śuklapakkhe va candramā //</p>	<p>chanda-doṣa-bhayā mohā yo dhammaṃ nābhivattati āpūrate tassa yaśo śukla-pakkhe va candramā.</p>

P : none

P₁ : DN III P182

P₂ : none

P₃ : AN II P18, 19, 12d) Th 292^b, 361^d

12^b, 13^b でSの *ativattati* に対してRは *abhivattati* となっているが、パラレルからは *ati-* が指示される。但し、このテキストでのローマ字化中、(S)t ⇄ (R)bh の交錯からはR版が適切

新資料 DHARMAPADA の基礎研究 I

な場合が多い (e. g. 205^b (S)tajetha ⇔ (R)bhajetha etc.)。S の 13^a では mohāḥ とあるが、同じく S の 12^a は mohā となっており、パラレルも mohā を指示する。文法的にも pl. nom. は不適當である。12^a, 13^a の chandadoṣabhayā は cpd. であるが、パラレルはすべて分離されている。12, 13偈は DN, AN でも対偈である。

[訳] 12. 欲望, 怒り, 恐怖そして愚かさによって正しい教えを害すれば, その人の名声は失なわれていく。黒分時における月のように。

13. 欲望, 怒り, 恐怖そして愚かさによって正しい教えを害することがないならば, その人の名声は満ちてくる。白分時における月のように。

21 (II—8)

pūrve cāpi pramajjittā /
yo pacchā na pramajjati /
so imāṃ visattikāṃ loke /
sato samativattati //

pūrve cāpi pramajjittā
yo pacchā na ve(?) pramajjati
so imāṃ visattikāṃ loke
sato **s**amativattati.

P : Uv XVI—6

P₁ : none

P₂ : ab) Uv. XVI—5^{ab}, cd) Uv. XVI—8^{cd}, 10^{cd}, Sn 768^{cd}, Th 457^{cd}

P₃ : ab) Dhp 172^{ab}

R^b にのみ ve が見られる。Uv XVI—6^b yas tu pūrvaṃ pramādyeha paścād vai na pramādyate にも vai が存在するが、これは韻律的配慮から介入されたと考えられる。R の ve はそれとの対応であろうが、このテキストでは付加することにより反って韻律が崩れる。

[訳] 以前は怠慢だったとしても、以後怠ることがないなら、世の中の満ち満ちた執着を正しく思念して超越する。

22 (II—9)

apramāda-garū bhikkhū /
pramāde bhaya-damśino /
abhavvo parihāṇāya /
nibbāṇasseva santike //

apramāda-garu bhikkhū
pramāde bhaya-damśino
abhavvo parihāṇāya
nibbāṇass'eva s'antike.

P : Dhp 32, Uv IV—32, G Dhp 73

P₁ : Mil ^P408, It ^P40

P₂ : ab) Dhp 31^{ab}

S^{ab} は pl. で、S^c は sg. (R^a の -garu のみは sg) と偈に数の不統一がみられる。P 及び Mil の

パラレルは sg. で、It のパラレルは pl. で偈が統一されている。このテキストにのみ混乱が生じている。R^d の s'antike の ' は必要か。すべてのパラレルは santike と校訂されている。

-damśino は Pāli の dassino, Skt. の darśino に、abhavvo は各々 abhabbo, abhavya に対応。

23—26 (II—10~13)

- | | |
|---|---|
| <p>23. apramāda-garā bhikkhū /
 pramāde bhaya-damśino /
 saṃyojanam aṇutthūlaṃ /
 daham aggīva gacchati //</p> <p>24. apramāda-ratā hoṭṭhā /
 saṃcittam anurakkhathā /
 duggā uddharathāttānaṃ /
 paṃke sanno va kuñjaro //</p> <p>25. apramāde pramudino /
 nipakāśīla saṃvṛtā /
 te ve kālena prācchanti /
 pathe prāto na śocati //</p> <p>26. apramāde pramodetha /
 na kāma-rati sandhave /
 evaṃ vihara lābhādī /
 śantacitto' nuddhato /
 ceto śamatham anuyutto /
 dukkhassantaro siyā //</p> | <p>23. apramāda-garū bhikkhū
 pramāde bhaya-damśino
 saṃyojanam aṇu-tthūlaṃ
 dahan aggīva gacchati
 apramāda-ratā hoṭṭhā
 sa-cittam anurakkhathā.
 24. durggā uddharathāttānaṃ
 paṃke sanno va kuñjaro
 apramāde pramudino
 nipakā śīla-saṃvṛtā.
 25. te ve (or ce) kālena prācchanti
 yattha prāto na śocati
 apramāde pramodetha
 na kāma-rati-sandhave.
 26. evaṃ viharāṇātāpī
 śānta-citto 'nuddhato
 ce <i>tu</i> śamatham anuyutto
 dukkhass'antakaro siyā.</p> |
|---|---|

P : (23) Dhp 31, Uv IV—29, G Dhp 74

(24) Dhp 327

(25, 26) none

P₁ : (24) DN II P¹120, Mil P¹379

P₂ : (23) ab) Dhp 32^{ab}, Uv IV—27^{ab} 28^{ab} 31^{ab} 32^{ab}, G Dhp 73^{ab}

(24) a) G Dhp 126^c ab) Uv IV—36^{ad} acd) G Dhp 132^{acd} b) G Dhp 124^d cd) Uv IV—27^{cd}

(25) a) Dhp 22^c, Uv IV—2^c, G Dhp 116^c

(26) a) Uv IV—2^c ab) Dhp 27^{ab}, G Dhp 129^{ab} 130^{ab} Th 884^{ab} b) Uv IV—12^b c) VI—7^a

P₃ : (25) abc) AN III P³329^{abc}

※ 23—26偈の S, R の区切り方に相違があるが、以下で論証する如く、S が適切である故、偈数は S に従う。

先ず、偈の構造上の問題点を吟味する。S は23偈以下26偈迄 4・4・4・6 句構成に対し、R は 6・4・4・4 句構成となっているが以下の理由で R は支持されない。23偈のパラレル Dhp, Uv, G Dhp は三本共に 4 句構成であり、又 S 24 には全同のパラレル Dhp が存在するという

こと、構文的にも S 24^{abc} の動詞はすべて imper. sg. によって統一が図られており、R の区切り方に依るならば 24 偈は sg. と pl. とが混在し a・b 句、c・d 句の関係が不統一となり、更に S 25^{abc} は AN にパラレルを有し、仮に R に従うとすれば、この a・b・c 句が 2 偈 (24^{cd}, 25^a) に分割されてしまうことになる。以上から 23—26 偈は S の校訂が正当なものとして採用されなければならない。

23 偈には 22 偈と同様、a・b 句が pl., c・d 句が sg. といった数の混乱が見られる。S 24^b saṃcitta が R 23^f では sa-citta とあり、パラレルからは R が適切である。但し、aff. (Skt.) sva- の語形は、本テキストでは二つの用例を提示する。55^a では、Pāli salābhaṃ, Skt. svalābhaṃ に対応する語として両版共に samlābhaṃ と表記され、又 S 357^c では sacitta- (Skt. svacitta-, 但し R 358^c は citta-) と表記される。sa, sva ⇔ sam の対応が認められるか否かは確定できない。S 25^c, R 25^a の prācchanti の語根は pra √ās か。acchati の語根に関する諸説の紹介は R. L. Turner, “sanskrit ā-kṣeti and pāli acchati in Modern Indo-tryan”, *Collected Papers 1912—1973*, OXFORD, 1975, P340 ff. を参照。但し、パラレル AN. では paccanti とあり、paṭi √i を示唆している。S 25^b の校訂に関しては、それに対応する R 24^d の方が適切である。S 25^d, R 25^b の śocati は sg. であり、S 25^c, R 25^a の prācchanti (pl.) との数の不統一が見られる。S 26^b, R 25^d の sandhave は Pāli santhavaṃ, Skt. samstavam (sam √stu) に対応している。この句の S の校訂は不適當で -rati- と cpd. にすべき。

[訳] 25. 正しい行ないを喜ぶ人々は賢明で戒を守る。彼らは次第に安住してゆき、道を得た人は嘆くことはない。

26. 正しい行いを好むべきであり、愛欲による楽しみに親しむな。そして静かな心を持った落ち着いた人々は利得等も排除しなさい。心の平静に努める人は苦を滅止すべきである。

41 (III—8)

yadā padesu dhammesu /
pāragū hoti brāhmaṇo /
athassa sabbe saṃyogā /
atthaṃ gacchanti jānato //

yadā yayesu **dhammesu**
pāragū hoti brāhmaṇo
ath'assa sabbe saṃyogā
atthaṃ gacchanti jānato.

P : Dhp 384, Uv XXXIII—72, G Dhp 14

P₂ : ab) Uv XXXIII—68^{ab} 73^{ab}, Ud P₅^{ab} abd) Uv XXXIII—69^{abd} 70^{abd} 71^{abd}

S^a は padesu, R^a は yayesu とあるが、異本と比較すると Dhp が dvayesu, Uv が sveṣu, G Dhp が dva'eṣu とあり、共通である Dhp と G Dhp 以外は三者三様である (法句経, 出曜経は Dhp, G Dhp を指示)。両校訂本では p ⇔ y, d ⇔ y との文字の交錯は顕著であり、R の ya-

yesu は誤写であろう。いずれにしても padesu は他のパラレルに見出せない語である。

42 (III—9)

sakhumo khīṇasaṃyogo /	sa khu so khīṇa-saṃyogo
khīṇamāna punabbhavo /	khīṇa-māna-punabbhavo
saṃghāvasevī dhammaṭṭho /	saṃghāvase vī(!) dhamm'atṭho
saṃghaṃ na upeti vedagū //	saṃghaṃ na upeti vedagū.

P, P₁ : none

P₂ : abd) cf. Uv VI—10^{abd}, cd) It ^P54^{cd}

P₃ : b) It ^P96^b cd) Sn 749^{cd}

S^a に sakhumo, R^a に sa khu so とあり, 類似句 Uv VI—10^a sa tu vi- が音韻的にこれに相当し校訂上からRを示唆する。しかし, 代名詞が一句に二度も配されていることに疑問が残る。一方 sakhumo も sakṣamo, sa kṣamo や sakṣemo, sa kśemo 等に還元可能であるかも知れないが, 厳密な意味で語形的に解消されえない。両校訂本で m ⇄ s は極めて混乱しており, どちらかが間違いであることは事実であるが今決定し難い。S^b で -māna と punabbhavo は分離されているがRのように cpd. にすべきである。S^c の saṃghāvasevī, R^c の saṃghāvase vī と S^d, R^d の saṃghaṃ における It, Sn のパラレルは saṅkhāya sevī と saṅkhaṃ とである。saṃgha と saṅkhā の相違のみならず, 前者の S^c, R^c は各々パラレルと校訂上にも差異がみられる。S, R では読解不可能である。

50 (IV—1)

[4a 1.2] sabbattha-saṃvaro sādhu /	sabbattha saṃvaro sādhu
sādhu sabbattha-saṃvaro /	sādhu sabbattha saṃvaro
sabbattha saṃvṛto bhikkhū /	sabbattha saṃvṛto bhikkhū
sabbadukkhā pramuccati //	sabba-dukkhā pramuccati.

これを次の51偈と比較すると, 50^{b-d} は 51^{d-f} に対応し, 50^a は単に 50^d sādhu sabbattha saṃvaro における語の置換された形となっている。この偈は51偈とは異なった新たに設定された偈であるように思われる。(尚, パラレルに関しては S, R の51偈の note を参照)。

S^{ab} の sabbattha-saṃvaro は分離すべきである。

63・64 (IV—14・15)

63. tatthāyam ādi bhavati /	tatthāyam ādi bhavati
iha praññassa bhikkhuṇo /	iha praññassa bhikkhuṇo

indriyagottī sāntoṣṭhī /	indriya-gottī sāntoṣṭhī
prātimokkhe ca saṃvaro /	prātimokkhe ca saṃvaro.
64. mitte bhajetha kallāne /	mitre bhajetha kallāne
śuddhājivī atandito /	śuddhājivī atandrīto
paṭisancara-vattissa /	paṭisandhara-vaṭṭissa
{5a} ācārakušālo siyā /	ācāra-kušālo siyā
tato prāmojja-bahulo /	tato pramojja-bahulo
sato bhikkhu parivraje //	sato bhikkhā parivraje.

P : (63) Dhp 375^{a-d}, Uv XXXII—26^{cd} 27^{ab}, G Dhp 59

(64) Dhp 375^{ef} 376^{a-d}, Uv XXXII—6, G Dhp 60

P₂ : (63) b) Uv XXIII—5^d d) Dhp 185^b, Uv XXXI—50^b, Ud. P^{43b}, DN II P^{49b}

(64) a) Sn 338^a ef) Uv XXXII—10^{ef} f) Uv III—18^d, XIII—16^d, Th 154^d, It P^{9d}, Sn 741^d
751^f 753^d 1039^d, SN I P^{13d} P^{53d}, J II P^{293d} IV P^{354d}

63・64偈とこれに対応する他文献の各句との関係を表示すると次の如くである。

63	a] Dhp 375 ^{a-f}]	Uv XXXII—26 ^{cd}] G Dhp 59 ^{a-d}
	b		Uv XXXII—27 ^{ab}	
	c			
	d			
64	a] Dhp 376 ^{a-d}]	Uv XXXII—6 ^{a-f}] G Dhp 60 ^{a-f}
	b			
	c			
	d			
	e			
	f			

このテキストの両偈の区切りは G Dhp のみと一致する。Dhp 375・376 は一連の10句であることはこのテキストと等しいが前半6句、後半4句に区切られる。Uv の場合、この63偈の対応偈は校訂本では連続であるが、2偈に分割されている(但し、この分割に関しては、断簡を収集した上での editor の配慮があり、問題を残す)。64偈に対応する6句は前4句と不連続であるが完全な一偈を構成している。これらを眺めてみると、Dhp の偈の区切り方に疑問がある。そこで B^o Dhp (KN vol. I p. 67) を参照すると、そこでは375偈を4句として376偈を6句としている(但し S^e P⁶⁶ は偈番号を付してはいないが区切りは PTS 版に等しい)。意味上から考察を加えても Dhp 375^{ef} はむしろ376偈と対応を示す内容を有する。更に Uv XXXII—6 の6句が独立した偈として存在している点からも、PTS 版 Dhp での375・376両偈の区切り方には再考を要す。

64^b について、S は paṭisancara-、R は paṭisandhara- とあるが、Dhp は paṭisanthāra-、Uv は pratisaṃstāra- と共に √str より派生した名詞であり、S の paṭisancara は √car より派生され、両者の意味が類似している。paṭisandhara は Pāli 形と相似であるが、これはブラークリット形か誤写かは判別できない。いずれにしても決定し難い。S の -vattissa、R の -vaṭṭi-

ssa はパラレルから各々 -vatti'ssa, -vaṭṭi'ssa と校訂すべきであり, vatti, vaṭṭi は対応語として Dhp で vutt', Uv で vṛtti が見出せる。Dhp との対応で S の vatti の方が適切か。

65 (V-1)

[5a l. 1] atthesu jātesu sukhā sakhāya /	atthesu jātesu sukhā sakhāya
pumñāṃ sukhāṃ jivita samkhayamhi /	pumñāṃ sukhāṃ jivita-samkhayamhi
toṣṭi sukhā yā itaritareṇa /	toṣṭi sukhā yā itari[tareṇa]
sabbassa pāpassa sukhāṃ prahāṇaṃ //	sabbassa pāpassa sukhāṃ prahāṇaṃ.

P : Dhp 331, Uv XXX-34

b・c 句は Uv の構成に一致するが, Dhp ではこのテキストと逆 (つまり c・b の順) に配されている。d 句 prahāṇaṃ は Dhp pahānaṃ と一致しているが, Uv では類似語の nirodhaṅ が使用されている。

66 (V-2)

sukhā mātteatā (yatā?) loke /	sukhā mātreyyatā loke
tato petteatā (yatā?) sukhā /	tato petreyyatā sukhā
śāmannatā sukhā loke /	śāmannatā sukhā loke
tato brāhmanntā sukhā //	tato brāhmannatā sukhā.

P : Dhp 332, Uv XXX-21

a 句で S が mātteatā (yatā?), R が mātreyyatā, そして b 句で S が petteatā (yatā?), R が petreyyatā となっている。S の (yatā?) は写本に対する Shukla のもう一つの読み方を示しているのか, それとも彼自身の設定か不明であるが, S の校訂には問題がある。但し中期アーリア語の特色の一つである子音の消失を示しているのか。尚, 従来よりこの語の訳については種々見られる (『真理のことば, 感興のことば』中村元訳 p. 133 参照) が, 再考を要する。

67 (V-3)

Sukhaṃ yāvaj jara śīlam /	sukhaṃ yāvaj jarā-śīlam
sukhā śraddhā pratiṣṭhitā /	sukhā śraddhā pratiṣṭhitā
sukhā attharatā vāca /	sukhā attha-rasā vācā
asmim mānājayo sukho //	asmim māna(?)khhayo sukho.

P : none

P₂ : ab) Dhp 333^{ab} abc) Uv XXX-20^{abc}

Shukla, Roth 共に 67 偈が Dhp 333, Uv XXX-20 と全同とし, 又 Bernhard も Uv XXX-

20 と Dhp 333 が全同としているが、上記の P₂ の如くに対応している。Dhp と Uv の二本を比較すると c 句のみが異なるが、同じ相違は漢訳「法句経」と「出曜経」にも見られる。要するに、この偈は a・b 句が Dhp, Uv と一致し、c 句は Uv のみ、d 句は独自の句であり、全体からすれば異色である。

c 句に S が -ratā, R が -rasā とあり、パラレルからは S が支持されるが意味的には両語とも類似しており、原語はどちらであったのか決定し難い。d 句で S が -jayo, R が -kkhayo となっており、jaya と khaya の双方の意味でどちらも訳出しうるが、この校訂の相違には驚かされる。

〔訳〕 老いに至る迄、戒を守ることは楽しい。信仰が定まっていることは楽しい。道理を楽しむ言葉は楽しい。慢に打ち勝つことは楽しい。

71 (V—7)

tasmā hi dhīraṃ ca bahuśśutañca /	tassā hi dhīraṃ ca bahuśśutañ ca
dhareya śīlavratamantam ayiraṃ /	dhoreya śīla-vratam antam ayiraṃ
taṃ tārisaṃ sappuruṣaṃ sumedhaṃ /	taṃ tārisaṃ sap-puruṣaṃ sumedhaṃ
sevetha nakkhatra-patheva candramā //	sevetha nakkhatra-pathe va candramā.

P : Dhp 208, G Dhp 177

(cf.) Uv XXV—25

各偈の構成上、全同のパラレルは Dhp と G Dhp であり、Uv は内容的には類似しているが以下に示すが如く韻律構成、語の配置、単語にかなりの異同がある。

dhīraṃ prājñaṃ niṣeveta śīlavantaṃ bahuśrutam /
dhaureyaṃ javasampannaṃ candraṃ tārāgaṇā iva //

Dhp の構成は PTS 版によれば tasmā hi のみ韻律外のもと見做され分離して配置されている。これを B° Dhp (p. 44 n.) によれば、本偈の枠内に収める構成が示されており、次のように配置される。

tasmā hi dhīraṃ paññañ ca / bahussutañ ca dhoraḥhaṃ /
sīlaṃ dhutavatam ariyaṃ / taṃ tādisaṃ sappurisaṃ //
sumedhaṃ bhajetha nakkhattapathaṃ va candimā //

このように複雑な異同をもつこの偈は注意されなければならない。

b 句 dhoreya śīlavratamantam (R dhoreya śīla-vratam antam は不可) を分離と見做すなら dhoreya が case-ending を持っていないことは問題である。Dhp は dhoraḥhasīlaṃ vatavantam とし、上述の B° は各々の三語が分離し、Uv は śīlavantaṃ と dhaureyaṃ とに分けられている。三者三様の表現が見られるが、このテキストの b 句の場合 dhoreya は一応 cpd. で校訂さ

れるべきであろうが、一方、他本と比較すれば *anusvāra* の欠落があったとも推定されうる。但し、ここで短音節が用いられているのは *metri causa* によるものとも考えられる。R^a の *tassā* はこのテキストにおける *m* ⇄ *s* の混乱によるものか。dhoreya, tārisaṃ は独自のプラークリット形か。

84 (VI—1)

ye keci śokā paridevitaṃ vā /	ye keci śokā paridevitaṃ vā
dukkhaṃ va lokamhi anekarūpaṃ /	dukkhaṃ ca lokamhi aneka-rūpaṃ
priyaṃ paṭicca prabhavanti ete /	priyaṃ paṭicca prabhavanti ete
priyeṣu santena bhavanti ete //	priye asante na bhavanti ete.

P : Uv V—3

P₁ : Ud 92

S^d の校訂に問題がある。priyeṣu santena bhavanti ete とあり、対して R^d では priye asante na bhavanti ete とする。S でも一応、読解可能であるが、Uv, Ud 両パラレルでは

Uv priye 'sati syān na kathaṃ cid etat

Ud piye asante na bhavanti ete

とあり、これらから考慮するならば、R の校訂が適確である。但し、-ṣu と a- が写本において読み違えられたものかどうかは問題である。尚、Uv, Ud と共に、84・85偈は対偈となっている。

87 (VI—4)

yesāṃ sannicayo nāsti /	yesāṃ sannicayo nāsti
ye pariññātabhojanā /	ye pariññāta-bhojanā
ākāśeva śakuntānāṃ /	ākāśe va śakuntānāṃ
padaṃ tesāṃ durannayaṃ //	padaṃ teśāṃ durannayaṃ.

P : none

P₂ : a-d) Dhp 92^{abef}, Uv XXIX—25^{abef}, 27^{abef} a) Uv XXXII—17^a ab) Uv XXIX—26^{ab}, 28^{ab}
c) Uv XXIX—26^e, 28^e, 29^e, 30^e, 31^e, 32^e d) Uv XXIX—29^f, 31^f

6句形式の Uv XXIX—25・26・27・28、及び29・30・31・32には順列組合せ方式のような一部単語が入替えられただけの類似した偈が配列されている。Dhp 92 は Uv XXIX—25 と、Dhp 93 は Uv XXIX—29 と全同関係を有している。このテキストの270偈 (Rは271偈) は Dhp 93, Uv XXIX—29 と全同関係にある。ここで問題としている4句で構成された87偈は270偈と同じように、Dhp 92, Uv XXIX—25 か27と全同であるべきところ、それらのc・d句 (Dhp : suññato animitto ca / vimokho yesāṃ gocaro /) が省かれた形式をとっている。その理由は判明しない。尚、Dhp, Uv のこれらの偈が連続しているのに対し、このテキストでは章も異な

り分離されている。また, S^d durannaym は単なる誤植か。

100・101 (VII—5・6)

100. akataṃ dukkataṃ śreyo / pacchā tapati dukkataṃ / dukkataṃ me kataṃ ti śocati / bhūyo śocati doggatiṃ gato //	akataṃ dukkataṃ śreyo pacchā tapati dukkataṃ dukkataṃ me kataṃ ti śocati bhū yo śocati yo ggateṃ gato.
101. katañca sukataṃ sādhu / yaṃ kattā nānutappati / sukataṃ me katanti nandati / bhūyo nandati soggateṃ gato //	katañ ca sukataṃ sādhu yaṃ kattā nānutapyati sukataṃ me kataṃ hi nandati bhūyo nandati soggateṃ gato.

P : (100) U_v XXIX—41

(101) U_v XXIX—42

P₂ : (100) ab) Dhp 314^{ab}, G Dhp 337^{ab}, SN I 49 G cd) cf. Dhp 17^{cd}

(101) ab) Dhp 314^{cd}, G Dhp 337^{cd}, SN I 49 G^{cd} b) Dhp 68^b, U_v IX—15^b, SN I 57

100・101偈は対偈である。以下に三異本との対応関係を表示する。

100	a	□	Dhp 314 ^{ab}	} U _v XXIX—41	□	G Dhp 337 ^{ab}	
	b	□					
	c	□	Dhp 17 ^{cd}				
	d	□					
101	a	□	Dhp 314 ^{cd}	} U _v XXIX—42	□	G Dhp 337 ^{cd}	
	b	□					
	c	□	Dhp 18 ^{cd}				
	d	□					

このテキストと全同関係にあるのは U_v のみで, Dhp と G Dhp は別個に対応関係を有し, これには SN も一致している。これより, これらの偈には二系統あることが窺える。

R100^d で yo ggateṃ と校訂されているが, これは doggateṃ の誤まりであろう。S101^c の katanti, R101^c の kataṃ hi は100偈との対応からも各々 kataṃ ti とあるべきか。doggate, soggate は注意すべき語形であろう。

110 (VII—15)

yadī kacceva taṃ kayirā / yaṃ prāpya hitam āttano / na śākaṭīkasantissa / mandam viro parākrome //	paṭīkacceva taṃ kayirā yaṃ nāpyā hitam āttano na śākaṭīka-mantrissa mantram dhīro parākrame.
---	---

P : U_v IV—16

P₁ : SN I 57, Mil 66

S^a の yadi に対して R^a は paṭi- とあるが、パラレルからはRが支持される。S^b の prāpya, R^b の nāpyā では、Sが pra √āp の ger. であるのに対してRは √jñā の pass. 3 sg. opt. nāpiyā を想起させる。パラレルの U_v では jāned, SN, Mil では jaññā と各々 √jñā の 3 sg. opt. をとる。それ故、これらからはRの語形が支持される。但し、それが pass. 形であるという点、及び -i- の欠落に関しては問題が残るが、音韻上省略も許容内であろう。S^c の -santissa, R^c の -mantrissa における両版の s ⇌ m の混乱は他所にも存在する (e.g. 159^b S の saranam, R の maranam 等) が、どちらにしてもパラレル -cintābhir, -cirtāya とは異なった形を呈している。この両形に関する多くの推測は可能であるが決定し難い。S^d の viro, R^d の dhiro についてはパラレルからはRが支持される。

111 (VII—16)

yathā gāhati homāggaṃ /	yathā sākaṭiko māggaṃ
sugaṃ hettā mahāpathaṃ /	samṃaṃ hettā mahā-patham
viṣamaṃ māggaṃ āsājja /	viṣamaṃ māggaṃ āsajja
akkha chinnotha jhāyati (royiti?) //	akkha-chinno tha jhāyati.

P : U_v IV—17

P₁ : SNI ^o57, Mil ^o66

S^a は gāhati homāggaṃ, R^a は sākaṭiko māggaṃ と各々校訂されているが、Sは読解不可能で、パラレルからもRの校訂が支持される。S^b の sugaṃ に対して R^b は samṃaṃ であり語形が異なる。パラレルからはRが支持されるが、sugaṃ も適義である。samṃaṃ の -ṃ- のように子音の直後に anusvāra がくることがあるのか。samṃaṃ の方が適切であろう。S^d の akkha chinnotha, R^d の akkha-chinno tha は akkha-chinno 'tha と校訂すべきか。但し 111^d と同一句が 112^d にあるがそこでは akkha-chinno va (R) となっている。S^d の (royiti?) は何のことか不明。

114 (VII—19)

abhūtavādī nirayaṃ upeti /	abhūta-vādī nirayaṃ upeti
yo cāpi kattā na karomīti āha /	yo cāpi kattā na karomīti āha
ubhopi te precca samā bhavanti /	ubho pi te precca samā bhavanti
nihīnakammaṃ manujā paratra //	nihīna-kammaṃ manujā paratra.

P : Dhp 306, U_v VIII—1, G Dhp 269

P₁ : Sn 661, Ud ^o45, It ^o42, J II ^o416・417

114^b は U_v の b 句 (yaś cāryed apy ācaratīha karma) と意味上ニュアンスが異なる。しかしその異本に全同の句 (yaś cāpi kṛtvā na karoti āha) が存在する。但し、このテキスト及び Pāli 諸

本では *karomi* であるのに対し、*karoti* である点は相違する。c 句で、*ubho* が *bhavanti* で受けられているが、これはこのテキストに *dual number* が存在しないことを示す一例である。

118 (VII—23)

<i>kuṇapassapi gaṃdhucchi /</i>	<i>kuṇapassa pi gaṃdhucchijjati</i>
<i>ḍṛti uttakitassapi /</i>	<i>uddhu(?)kitas payirā ti</i>
<i>rāti accayā puruṣassa adhammacāriṇo /</i>	<i>accayā puruṣasya adhamma-cāriṇo</i>
<i>annāhaṃ gandho na chijjati //</i>	<i>annāhaṃ gandho na chijjati.</i>

P : none

この偈に関してはパラレルは見出しえない。それ故にかS, R共に校訂自体に混乱が多く、適確な読解は困難である。特に a・b 句に顕著である。S の校訂は韻律上、基本的に *śloka form* で纏めようとしている跡が見られるが、R の校訂では各句の韻律上の理解は不可能である。但し、意味の上からはRの校訂がより理解しうる。尚、c 句の *adhammacāriṇo* は韻律上の破格的な挿入と見られる。現在この偈のパラレルを調査中であり、ここでは不十分なテキストからの訳は避ける。

119・120 (VII—24・25)

119. <i>yatha gr̥hapatayo prabhūtaratanā /</i>	<i>yatha(?) ggrahapatayo prabhūta-ratanā</i>
<i>prābhitte nagaramhi dahyamāne /</i>	<i>āḍi(?)ttena śaramhi dahyamāne muttāmaṇi</i>
<i>muttā-maṇi-kaṭika-rajata-heto /</i>	<i>phaṭika-rajata-heto vyāyamanti</i>
<i>vyāyamanti api niharema kiṃci //</i>	<i>api niharema kiṃci.</i>
120. <i>tathavidha śamaṇā prabhūtapraṇṇā /</i>	<i>ayirā ayira-pathesu sicchamānā</i>
<i>ayjrā ayirapathena sicchamānā /</i>	<i>jāti-jarā-maraṇa-bhayāppittā</i>
<i>jāti-jarā-maraṇa-bhayā-ddittā (tā?) /</i>	<i>dukkhāto vyāyamanti</i>
<i>dukkhāttā vyāyamanti api prāpuṇema</i>	<i>api prāpuṇema śāntiṃ.</i>
<i>śāntiṃ //</i>	

P : none

119・120は対偈となっているが、この両偈にもパラレルは見出しえない。Sは119・120共に韻律上母音の軽重からはほぼ完全な *aupacchandāsika* (16+18)×2 *mātrās* で校訂されているが、Rの方は韻律上から解釈不可能であり、意味の上からも問題がある。更にR120にはS120^aに相当する句が完全に欠落しているが、同一写本によりながらこれだけの部分を欠いていることは不可解である。

S119^bに *prābhitte nagaramhi*, R119^bに *āḍitteua śaramhi* とあるがRの校訂では全く読解不可能である。Sの *prābhitte* は *nagaramhi dahyamāne* との意味的關係から *pra-ā/√bhid* を想起させる。S^b が *absolute loc.* とすれば、*prābhitte* は *pp.* でなければならぬが、*√bhid*

の pp. が bhinna である故、語形上異なる。しかし、√bhid の現在形に bhintte という形が存在する。語形的にみて prābhitte なる語は bhinna と bhintte との混合によって考えうる。それは一方、独自形とも解釈しうるが、いずれにしても推測の域を出ないことだけは事実である。119^o の -heto についてであるが、このテキストの S 326^a (R 327^a) に heto の語が見出される。その偈は DhP 84 にパラレルを有し、この heto は hetu に相当していることが判る。ここで heto の case が問題となるが、これは sg. abl. hetoḥ の変形と考えるのが妥当か。他方、意味上から rajata との対応を考慮に入れれば、he- と -to の間に ma の欠落があったとして hemato を想定しえないでもないが、これは無理な見方であろう。S 120^b に -pathena, R 120^a に -pathesu とあるが、これは R が適切か。S 120^c に -bhayāddittā, R 120^b に -bhayāppittā とあるが、R では読解しえない。S の校訂からは ādi や ā/dip の pp. 等々と種々に考えられるが、この校訂の文字に従えば、-bhayād dittā (²/dā の pp.) とするのが最も適切ではないか。但し、本テキストには Abl.-āt を示す例は他にない。S 120^d の dukkhāttā, R 120^c の dukkhāto で、S は dukkhā attā を意味しているのか。どちらにしても dukkha は abl. を示唆している。

以上のように、文法、或いは語形論上の問題を含むこの偈の完全な訳は困難であるが、一応の試訳を示す。

〔訳〕(119) 多くの宝石をもった長者は町が破壊され燃えさかる時、真珠、マニ、象牙の飾り、銀 [を守る] ために、必死になる。我々は何を除去しるのであろうか。

(120) その如く、沙門は最高の智慧を有し聖者で聖なる道に学びながら、生、老、死、恐怖を離れ、苦と戦う。我々は寂靜を得るべきである。

121 (VIII—1)

121. [7b l. 4] na puṣpa-gandho paṭivātam eti /	na puṣpa-gandho paṭivātam eti
na candanaṃ tagaraṃ vāhḷikaṃ vā /	na candanaṃ vāhḷikaṃ vā
satāṃ tu gandho paṭivātam eti /	satān tu gandho paṭivātam eti
sabbā diśā sappuruṣo pravāti //	sabbā diśā sappuruṣo pravāti.

P : DhP 54, Uv VI—16, G DhP 295

P₁ : Mil P333

S^b の tagaraṃ が R^b には存在しない。他のパラレルにも存在しており、又、韻律の点からも、この偈は triṣṭubh であるから、tagaraṃ は必要であり、R の校訂には疑問が残る。

132 (VIII—12)

śaikho paṭhaviṃ vijehiti /	śekho paṭhaviṃ vijehiti
----------------------------	-------------------------

新資料 DHARMAPADA の基礎研究 I

yamalokaṃ va imaṃ sadevakaṃ /	yama-lokaṃ va imaṃ sadevakaṃ
so dhammapade sudeṣite /	so dhammapade sudeṣite
kuśalo puṣpam iva prajehi //	kuśalo puṣpam iva prajehiti.

P : Dhp 45, Uv XVIII—2, G Dhp 302

P₂ : bd) Uv XVIII—1^{bd}

S^a に śaiko (R^a は śekho) とあるが、S のこの母音 -ai- の存在はテキスト中、他の用例としては R 189^f naiva のみで、他に確認されない。S^d に prajehi とあるが、R^d には prajehiti とあり、対偈となっている 131^d の S の校訂にも prajehiti となっている故、-ti が必要である。この prajehiti に対応する語は Dhp で paccasati, Uv では praceṣyati と共に pra/ci が指示されている。このままだと pra/vji と考えられるが、許容されるのか。或いは、pracehiti の誤りか。

135・136 (VIII—15・16)

135. yathā saṃkāra-kūṭamhi /	yathā saṃkāra-kūṭamhi
ujjhitamhi mahāpathe /	ujjhitamhi mahā-pathe
padumaṃ uṭṭhidaṃ assa /	padumaṃ tabbhidaṃ(?) assa
śuci-gandhaṃ manoramaṃ //	śuci-gandhaṃ manoramaṃ.
136. evaṃ saṃkāra-bhūtesu /	evaṃ saṃkāra-bhūtesu
a[86]ndha bhūte pṛthujjane /	andha -bhūte puthujjane
atirocanti praṇñāya /	atirocanti praṇñāya
samma-sambuddha sāvakā //	samma-sambuddha-sāvakā.

P : (135) Dhp 58, Uv XVIII—12, G Dhp 303

(136) Dhp 59, Uv XVIII—13, G Dhp 304

135・136は対偈である。

S 135^e の uṭṭhidaṃ assa, R 135^e の tabbhidaṃ assa に対して、パラレルの Dhp では tattha jāyetha, Uv では tatra tu jāyeta, G Dhp でも tatra ja'e'a となっている。assa は √as の opt. と解せるが、uṭṭhidaṃ, tabbhidaṃ は不明瞭である。但し、パラレルとの比較によって意味上より、uṭṭhidaṃ を ud√sthā の pp. uṭṭhitam と解せば読解可能となる。S 136^{bd} の各々 andha bhute, -sambuddha sāvakā は R の校訂のように cpd. とすべきである。136^b で S は pṛthujjane, R は puthujjane となっているが、S の -r-, R の -u- は、ここではどちらが適切か判明しない。

137 (IX—1)

[8b l. 1] manujassa pramattacāriṇo /	manujassa pramatta-cāriṇo
tahnā vaddhati mālutā iva /	tahnā vaddhati mālutā iva
mā prāpnuvate hurāhuraṃ /	sā prāp ^l avate hurā-huraṃ
phalam eṣīva vanamhi vānnaro //	phalam eṣī va vanamhi vānnano(!).

P : Dhp 334, Uv III-4, cf. G Dhp 91

P₁ : Th 399

c 句で S は mā, R は sā と校訂されているが Dhp, Uv, Th には共に so, sa と代名詞 tat の m. sg. nom. 形となっている。S° は禁止形となり特異である。R も f. sg. を示し、指示する語 (tahnā) が他のパラレルとは異なる。同じく c 句で S が prāpnuvate, R が prāplavate とあるが、語根からは前者が √āp (BHS p. 205 参照)、後者が √plu と、異なり、パラレルからは R の方が支持される。

Pāli taṇhā, Skt. tṛṣṇā に相当する語が、このテキストでは tahnā (但し S には 277^b で taṇhā, 401^a で tanham と異例が見られる) とされており、これは独自形として注意すべきである。vaddhati も独自形か。

138 (IX-2)

yaṃ cemā saḥate jaṃmi /
tahnā loke duraccayā /
śokā tassa pravaddhanti /
oraṭṭhā(?) veruṇā iva //

yaṃ c'esā saḥate jaṃmi
tahnā loke duraccayā
śokā tassa pravaddhamti
ovaṭṭhā beruṇābhā(?) va.

P : Dhp 335, Uv III-9

P₁ : Th 400

この偈は 139 偈 (P : Dhp 336, Uv III-10, P₁ : Th 401) と対偈となっている。a 句で S が cemā, R が c'esā とあるが、前偈と同様、m ⇄ s の混乱がみられる。cemā は ca imā と解せるが、このテキストでこの samdhi は 52^d に samvṛtendriyo と 1 例みられる。パラレルからどちらが適切か決定し難い。d 句で S の oraṭṭhā, R の ovaṭṭhā について、水野博士 (『法句經の研究』 p. 225) は S に依拠しながら ovaṭṭhā という語形を採用しておられる。Dhp, Th が abhivaḍḍham, Uv が avavṛṣṭā とあり、意味上からも R の語形が支持される。しかし、oraṭṭhā でも読解可能である。a・b 句の文章構造に関して、Dhp と Uv に多少の相違が見られるが、この偈は Dhp と一致している。同様の問題は 139 偈にも見られる。

141 (IX-5)

tahnā vatiyo puruṣo /
drīgham addhānasamsari /
etthabhāvaṃ a(?)thābhāvaṃ /
tattha tattha punappuno //

tahna(!)-vitiyo puruṣo
drīgham adhvānaṃ saṃsari
ettha bhāvaṃāthz-bhāvaṃ
tattha tattha puna-ppuno.

P, P₁ : none

P₂ : abc) Uv III-12^{abe}, Sn 740^{abc}, It 9^{abc}, AN II 10^{abc}

この偈と全同関係にある Dhp, Uv, G Dhp は存在しないが、のみならず Dhp, G Dhp にはパラレルの句も見出せない。a 句における S の *tahnā vatiyo*, R の *tahna-vitiyo* は、Uv では *trṣṇādvitiyaḥ*, Sn, It, AN では *taṇhādutiyo* となっている。vatiyo と vitiyo のどちらが正確であるのかは、332^a に両版共 *vitiyaṃ* と校訂する例が見られることより、R の *-vitiyo* が採用されるべきか。この語と対応語との比較からみられる語形上の相違は写本上に問題があるのか、それともこの語の独自形の故なのだろうか。いずれにしても a 句のこの二語は R の校訂の如く cpd. でなければならぬ。b 句で S が *addhānasamsari*, R が *adhvānaṃ samsari* とあるが、*samsari* は *sam√sr* の aor. 3 sg. であり、S のような校訂は疑問である。S の *addhāna-* (Pāli 形) と R の *adhvānaṃ* (Skt. 形) の語形的な相違も理解できない。尚、70^b には、この逆の校訂が見られる。c 句における S の *etthabhāvaṃ athābhāvaṃ*, R の *ettha bhāvaṃñāthībhāvaṃ* は S に問題がある。Uv には *itthaṃbhāvānyathībhāvaḥ*, Sn には *itthabhāvāññāthābhāvaṃ* とあり、S には Skt. の *anya*, Pāli の *añña* に相当する語がない。

b 句の *drīgha* は *dirgha*, *dīgha* の特異形として注意すべきである。

尚、142 偈はこの偈と連続して配列されているが、この配列は Sn, It に同じで、Uv とは異なる。Dhp には偈自体が存在しない。

143 (IX—7)

na taṃ dṛḍḍhaṃ bandhanaṃ āhu dhīrā /
yad āyaṣaṃ dārujaṃ babbajaṃ vā /
sārattarattā maṇi-kuṇḍalesu /
putresu dāresu ca yā apekhā //

na taṃ dṛḍḍhaṃ bandhanaṃ āhu dhīrā
yad āyaṣaṃ dārujaṃ babbajaṃ vā
sārattarattā maṇikuṇḍalesu
putreso dāresu yā apekhā.

P : Dhp 345, Uv II—5, G Dhp 169

P₁ : SN I ^p77, J II ^p140

P₂ : cd) Th 187^{cd} d) Sn 38^b

c 句を対応偈と比較すると次の通りである。

143^c sārattarattā maṇi-kuṇḍalesu
Dhp 345^c sārattarattā maṇikuṇḍalesu
Uv 11—5^c saṃpraktacittacya hi mandabuddheḥ
G Dhp sarata-cita maṇi-kuṇḍaleṣu

このテキストの c 句は Dhp と一致し、Uv とは異なる。G Dhp は Dhp と Uv との折衷された句と言える。これは伝承上の微妙な相違を示しているのであろうか。

144 (IX—8)

etaṃ dṛḍḍhaṃ bandhanaṃ āhu dhīrā /

etaṃ dṛḍḍhaṃ bandhanaṃ āhu dhīrā

oharimaṃ sukhumaṃ dupramañcaṃ /	ohāriṇaṃ(ormaṃ)sukhumaṃ dupramañcaṃ
etampi chettāna vrajanti santo /	etaṃpi chettāna vrajanti santo
anapekhino sabba dukhaṃ pralāya //	anapekhino sabba-dukhaṃ prahāya.

P : Dhp 346, Uv II—6, G Dhp 170

P₁ : SN I ^P77, J II ^P140

P₂ : cf. cd) J III ^P396^{cd}

d句においてSは sabba dukhaṃ, Rは sabba-dukhaṃ となっているが, Rの如く cpd. にすべきである。これの対応語はすべて kāma-sukham (G Dhp は kama-suhu) とあり, 表現の相違がみられる。尚, S^b の ohāriṇaṃ の -m- は -n- とあるべきであるが, これは誤植であろうか。

149 (IX—13)

tahnāya purakkhatā prajā /	tahnāya purekkaḥā prajā
parisappanti śaśo va vādhito /	parisappanti śaśo va bādhitō
te saṃyojana-saṅga-sattā /	te saṃyojana-saṅga-saṅga(!) sattā
gabbham upenti punappuro ciraṃ hi //	garbbham upenti pura-ppuno ciraṃ pi.

P : Dhp 342, Uv III—6

P₂ : cf. d) G Dhp 95^d

d句の gabbham upenti (但しRは garbbham upenti) に対し, 異本の Dhp は dukkham upenti, Uv は duḥkhaṃ yānti, G Dhp は yokaṃ a'edi (Brough は yogam āyānti と還元する) となっており, 各々興味深い表現の相違を呈している。但し, gabbhaṃ upeti という表現は, Pāli 文献でも Dhp 325^d, Th 17^d, 101^d 等で用いられている。S^b の vādhito, R^b の bādhitō については, Dhp との対応からも √bādh の p. p. と考えられる故, Rの方が適切であろう。R^c の -saṅga sattā は cpd. にすべきであろう。

159 (X—3)

tato malataraṃ brūmi /	tato malataraṃ brūmi
avijjā saraṇaṃ malaṃ /	avijjā maraṇaṃ(!) malaṃ
ete male prahattāna /	ete male prahattāna
niṃmalā caratha bhikkhavo //	niṃmalā caratha bhikkhavo.

P : Dhp 243

a句に brūmi と一人称形が見られるが, Dhp にはこの語は存在しない。S^b に saraṇaṃ, R^b に maraṇaṃ とあるが, Dhp では paramaṃ となっている。意味上, Rでは読解不可能であり, Sも問題を残す。このテキストでは (m ⇌ s) ⇌ p の混乱が見られる故に, 両校訂本共に誤写とも考えられる。c句で ete male と pl. acc. が用いられているが, Dhp では etam malaṃ と sg. acc. で偈の構造からも sg. が適切である。又, d句では niṃmalā と pl. nom. になっ

ているが、これは、対応偈 Dhp の nimmalā hotha の場合は $\sqrt{bhū}$ の理由により nom. が適切。ここでは \sqrt{car} の故に acc. であるべき。

162 (X—6)

<i>upṭamassa ghaṭassa āttanā /</i>	<i>uyyamassa ghaṭassa āttanā</i>
<i>kaṃmāro rajataṃ va niddhame /</i>	<i>kaṃmāro rajataṃ va niddhame</i>
<i>niddhāntamalo anaṅgaṇo /</i>	<i>niddhānta-malo anaṅgaṇo</i>
<i>vibhiyaṃ(?) ayira-bhūmim e[10 a]ti //</i>	<i>vitiyaṃ ayira bhūmim emi.</i>

P, P₁: none

P₂: b) Uv II—10^c bc) Uv XVI—3^{ee} c) Dhp 238^c cd) Dhp 236^{ed}

この偈には全同の相応偈は存在せず、b・c・d 句のみが各々パラレルに見出され、a 句はこの偈独自のものである。S^a *upṭamassa*, R^a *uyyamassa* について、S は不明であるが R は $\sqrt{ud\sqrt{yam}}$ より派生した名詞 *udyama* の変形とみれば、解しうる。S^d の *vibhiyaṃ*, R^d の *vitiyaṃ* に関して、S の校訂ではこの類似語形が 11^b の *vibhiyatā* (R では *bitiyatā*) に、R の校訂では 141^a の *-vitiyo* (S では *vatiyo*) に見られる。11^b のパラレル Dhp 330^b, Uv XIV—16^b には *sahāyatā* とあり、S・R 共に異形を呈している。今、R 141^a の如く、*-vitiyo* を *dvitiyaḥ* と、S 11^b の如く *vibhiyatā* ($\sqrt{vi/bhī}$ より派生語?) としても、この d 句は解することができない。この Dhp の相応句には *dibbaṃ* とあり、S の *vibhiyaṃ*, R の *vitiyaṃ* とは語形的に対応しているとは考えられない。唯、*dibba* の異形である *diviya* と比較すれば、音声上、特に S の方に類似性が認められ、この元の語は *diviya* であると想定されうるかも知れない。しかし、これはあくまで推測の域は出ない。S^d の *eti*, R の *emi* は文法上、S の方が適切である。R^d の *ayira bhūmim* は cpd. でなければならぬ。

〔訳〕 自ら熱心に努力専心している鍛冶工が（鑄を）取り除くように、垢れが除かれた、汚れない人は、天なる聖地へと趣く。

164 (X—8)

<i>sujīvaṃ ahirikena /</i>	<i>sujīvaṃ ahirikena</i>
<i>saṃkiliṣṭantu jīvati /</i>	<i>saṃkiliṣṭan tu jīvati</i>
<i>pakkhaṇḍinā pragabbheṇa /</i>	<i>prakkhaṇḍinā prakabbheṇa</i>
<i>kāka-sūreṇa dhamṣinā //</i>	<i>kāka-sūreṇa dhamṣinā.</i>

P: Dhp 244, Uv XXVII—3, G Dhp 221

この偈は 165 と対偈になっている。この偈の a→b→c→d 句に対し、Dhp. Uv. G Dhp は a→b→c→d 句となっており、b 句と d 句が他の異本と逆順をとっている。S^b の *saṃkiliṣṭantu* は

Rの如く *saṃkiliṣṭan tu* と校訂されるべきである。S° に *pakkhaṇḍinā* とあるが、このテキストでは接頭辞 *pa-* の用例は他に見られず、*pra-* のみがいわれている故に、Rの如く *prakkhaṇḍinā* とすべきであろう。

169・170 (X—13・14)

169. <i>alajjitabbe lajjanti /</i>	<i>alajjitabbe lajjanti</i>
<i>lajjitabbe na lajjatha /</i>	<i>lajjitabbe na lajjatha (!)</i>
<i>abhaye bhaya-daṃṣāvi /</i>	<i>abhaye bhaya-daṃṣāvi</i>
<i>bhaye cābhaya-daṃṣino /</i>	<i>bhaye cābhaya-daṃṣino</i>
<i>micchadṛṣṭi-samādānā /</i>	<i>miccha-dṛṣṭi--samādānā</i>
<i>sattā gacchanti doggaṭiṃ //</i>	<i>sattā gacchanti doggaṭiṃ.</i>
170. <i>avajje vajjamatino /</i>	<i>avajje vajja-matino</i>
<i>vajje cāvajjasamṇiṇo /</i>	<i>vajje cāvajja-samṇiṇo</i>
<i>micchandṛṣṭi-samādānā /</i>	<i>miccha-dṛṣṭi-samādānā</i>
<i>sattā gacchanti doggaṭiṃ //</i>	<i>sattā gacchanti doggaṭiṃ.</i>

Pは以下の表において示す。

169	a] Dhp 316 ^{ab}] Uv XVI—4 ^{a-f}] GDhp 273 ^{a-f}	
	b				
	c] Dhp 317 ^{ab}
	d				
	e] Dhp 316 ^{cd} 317 ^{cd}
	f				
170	a] Dpp 318 ^{a-d}] none] none	
	b				
	c				
	d				

上記の如く、169偈の形式は Uv, GDhp に一致し、170偈は Dhp のみに全同偈が存在する。169偈に相応する Dhp は二偈に分割されている。

169^b の *lajjatha* に関して、これを imper. 2 pl. としては意味上解釈に無理が生じる。その対応語は Dhp で *lajjare*, G Dhp で *lajjadi* (尚, Uv は *-lajjinaḥ* と pp.) と各々 pr. 形で示されている故に、pr. 2 pl. と理解されるが、二人称であるという点に疑問を残す。*-atha* を *metri causa* による *-ātha opt. 3 pl.* としても意味上問題がある。いずれにしても、a・b 句は 3 pl. (Dhp は 3 pl. G Dhp 3 sg.) で数が統一されるべきであることから、*lajjatha* は 3 pl. と見做されなければならない。尚, Uv は a 句で pl., b 句で sg. と数に不統一が見られる。

179—181 (XI—6~8)

179.	mam eva katamannentu / gṛhī pravrajitā ca ye / na me <i>pratibalā</i> assa / kiccākiccesu kesu cī //	mam'eva kata mannentu gṛhī pravrajitā ca yena me atibalā assa kiccākiccesu kesu cī.
180.	iti bālassa saṃkappo / icchā māno ca vaddhati / <i>aṇṇā</i> hi lābhopaniṣā / <i>aṇṇā</i> nibbāṇa-gāminī //	iti bālassa saṃkappo icchā māno ca vaddhati <i>aṇṇā</i> hi lābhopaniṣā <i>aṇṇā</i> nibbāṇa-gāminī.
181.	evam etaṃ yathābhūtaṃ / paśyaṃ buddhassa śāvako / sakkāraṃ nābhinandeyā / vivekam anubrūhaye //	evam etaṃ yathā-bhūtaṃ paśsam(!) Buddhassa sāvako sakkāraṃ nābhinandeyā vivekam anubrūṃhaye.

P は以下の表において示す。

179	a b c d	Dhp 74 ^{a-f}	Uv XIII—4 ^{a-d}		
180	a b c d			Uv XIII—5 ^{a-d}	
181	a b c d				Uv XIII—6 ^{a-d}

上記の他に p₂: (181) d) Uv XVI—14^b

179—181偈の構成は Uv と一致するが、Dhp は各12句を二分して6句構成の二偈とする。

S 179^a の mam eva はRの如く mam'eva と、又 katamannentu もRの如く分離するのが適切である (kata=kata D. ANDERSEN “A PĀLI GLOSSARY” p. 66)。179^{b-c} でSは……ye / na……, Rは……yena / と各々校訂されているが、韻律上から見れば、Sは完全な śloka 形によって校訂されており、一方、Rは b・c 句において śloka の形式が崩れている。今、Sの校訂に従えば、この c 句は na 否定辞をもち、Dhp (mam' evātivāsā assu), Uv (mama prativaśās ca syuh) と多少異なった対応句となる。179^c の assa は Dhp assu, Uv syuh と比べれば opt. が指示されるが、ここでは文法上 pl. でなければならず、その点 assa は sg. の故に支持されない。故に、assa は assu との誤りか、或いは opt. 3 pl. を許容する新出語とも考えうるが確定できない。S 181^b の paśyaṃ はRでは paśsam となっているが、このテキストではこの paśyam を除いてすべて paśsam 形が採用されていることより、Rの方が適切であろう。

183 (XI—10)

abalaṃ tassa balaṃ hoti /	abalaṃ tassa balaṃ hoti
yassa bāla-balaṃ balaṃ /	yassa bāla balaṃ balaṃ
balassa dhammamuttassa /	balassa dhamma-guttassa
paṭivattā na vijjati //	paṭivattā na vijjati.

P : cf. Uv XX—6

P₁ : SN I P222 · 223

S, R の notes はこの偈と Uv XX—6 を全同関係と見做しているが、以下に示すように語の細かな相違を含み微妙な異なりが見られる。

abalaṃ hi balaṃ tasya / yasya krodhe balaṃ balaṃ /
 kruddhasya dharmahinasya / pratipattir na vidyate //

特に c 句において相違が目立つが、別に Uv の異本 (LB) には bālasya muktadharmasya とある。この異本からは S の校訂が支持されるが、しかし一方、SN の対応偈に balassa dhammaguttassa とあり、これからは R が支持される。S の notes には Uv だけが、R には Uv 及び SN がパラレルとして挙げられている点より推察すれば、m, g 各々が写本において区別し難い状態にあり、校訂者がそれを決定する際、各自が見出したパラレルに従ったものといえる。しかし、同一写本よりの校訂の故に、そのどちらかであり、今敢えて決定しようとするれば、語形上 SN に対応させたであろう R に従うべきか。R^b の bāla balaṃ は cpd. にすべきである。

〔訳〕 愚かな力が力であると〔思っている〕その人の力は無力なものである。正しい道理を守る力を有する人には反論者はいない。

185 (XI—12)

drīghā assa yato rātrī /	drīghā assup(su)ato rātrī
drīghaṃ śāntassa yojanaṃ /	drīghaṃ śāntassa yojanaṃ
drīgho bālāna samsāro /	drīgho bālāna samsāro
saddhṃmam avijānatāṃ //	sad-dhammaṃ avijānatāṃ

P : Dhp 60, Uv I—19

P₂ : d) Dhp 38^b, J I P400^b, Uv XXXI—28^b

S^a の assa yato は解釈不可能であるが、R^a の assup(su)ato は √svap の part. gen. を予想させる。対応語は jāgarato であることを考え合わせるならば R の校訂が適切である。S^d の saddhṃmam は誤植であろう。

186—189 (XI—13~16)

186. pūti <i>gandhe</i> kuśāggeṇa / yo naro upavajjati / kuśāpi pūtiṃ vāyanti / evaṃ bālopasevanā //	pūti- <i>macche</i> kuśāggreṇa yo naro upana hyati kuśāpi pūtiṃ vāyanti evaṃ bālopasevanā.
187. tagarañ ca <i>mulāgandhi</i> / yo naro upavajjati / <i>mṛdum</i> pi surabhiṃ vāti / evaṃ dhiropasevanā //	tagarañ ca <i>palāśamhi</i> yo naro upana hyati <i>patraṃ</i> pi surabhiṃ vāti evaṃ dhiropasevanā.
188. akaronto'pi ce pāpaṃ / karonte upasevati / <i>gandhiyo</i> hoti yāvamhi / araṇṇo cāssa ūhati //	akaronto pi ce pāpaṃ karonte upasevati <i>śaṅkiyo</i> hoti <i>pāpamhi</i> avaṇṇo cāssa <i>rūhati</i> .
189. sevamāno sevamāne / saṃpuṭṭho saṃkusaṃ pare / saro litto kalāpe vā / alitte upaliṃpati / upalepatayā dhiro / neva pāpasakhā siyā //	sevamāno sevamāne saṃpuṭṭho saṃ ph usaṃ pare śaro litto kalāpe vā alitte upaliṃpati upalepa- <i>bh</i> ayā dhiro <i>naiva</i> pāpa-sakhā siyā.

P : (186) Uv XXV—7 (188) Uv XXV—9 (189) Uv XXV—10

P₁ : (186) It P68, J IV P435 VI P236

(187) It P68, J IV P436 VI P236

(188) It P67.

(189) It P68, J IV P435 VI P236

P₂ : (186) b) Uv XXV—8^b

(187) ab) Uv XXV—8^{ab} b) Uv XXV—7^b

この各偈全般に亘って S と R の校訂は相当な相違を見せている。これは写本に判読困難な箇所が多いことを示している。S の校訂では読解不能な箇所が多いのに比べ、R は Uv, It を意識して校訂がなされたのか、整っている。各々の検討は以下の通りである。

186^a における S の -gandhe, R の -macche は Uv, It より R が支持される。-gandhe も読解可能であるが意味上 R が適切である。186^b の S upavajjati, R upanahyati (187^b も同様) も同じ理由で R が適切である。187偈の S^a mulāgandhi は不明であり、R^a palāśamhi は Uv (palāśapatreṇa) It (palāśena) と対応する。S^c の mṛdum に対し R^c は patraṃ とあるが、ここでは vāti の主語となるべき名詞が必要であり、又、パラレルからも R の patraṃ が支持される。188偈の S^d の校訂は解釈不可能である。189偈の S^b saṃkusaṃ, S^e upalepa-tayā は各々 R に従うべきである。R^f に naiva と -ai- の母音が表記されているが、これはこのテキストでは稀である (cf. 132 S^a)。

テキスト全般における両本の校訂状態に比べて、これらの偈に限って R の校訂のみが優先し

ているが、Sも当然パラレルと対応したのであろうから校訂に読解不可能な箇所を多く残したということは、逆にRの整った校訂にも写本ではどうであったか、という疑問を起こさせる。

193・194 (XII—20・21)

193. nāssaṃ pāpassa maññeyā /
 nametaṃ āgamiṣyati /
 udavindu-nipātena /
 udakumbho'pi pūrati /
 pūrāte bālo pāpassa /
 thokathokaṃ pi ācināṃ //
194. nāssaṃ puññassa manyeyā /
 nametaṃ āgamiṣyati /
 udavindu-nipātena /
 udakumbho'pi pūrati /
 pūrāte praññā praññassa /
 tho[11b]kathokaṃ pi ācināṃ //

193—195 (XII—20~22)

193. nāppaṃ pāpassa maññeyā
 na m-etaṃ āgamiṣyati
 uda-bindu-nipātena
 uda-kumbho pi pūrati.
194. pūrāte bālo pāpassa
 thoka-thokaṃ pi ācināṃ
 nāppaṃ puññassa mayeyā
 na m-etam āgamiṣyati.
195. uda-bindu-nipātena
 uda-kumbho pi pūrati
 pūrāte prañño puññassa
 thoka-thokaṃ pi ācināṃ.

S 193・194偈は6句を各1偈と解釈するのに対してRは4句構成の3偈とする。パラレルすべてはこれらの12句を6句構成の2偈としている。そこで以下のPはSに従う。

P : (193) Dhp 121, Uv XVII—5, G Dhp 209

(194) Dhp 122, Uv XVII—6, G Dhp 210

P₂ : (193) b) Dhp 122^b Uv IX—10^b11^b, Uv XVII—6^b, G Dhp 210^b

(194) b) Dhp 121, ^b Uv IX—10^b11^b, Uv XVII—5^b, G Dhp 209^b

この12連句は6句の偈によって完全な対偈となっており、Rが3偈に区切った理由は理解できない。

S 193^a・194^a の assaṃ はパラレルよりRの appaṃ が支持される。このテキスト中、s⇌pの文字の混乱がみられるが、ここはSの誤写であろう。同じく193^a・194^aにおける nametaṃに対してRは na m-etaṃ と校訂されているが、パラレルと比較すると Dhp で na man tam, Uv で naitam mām, G Dhp で na me ta とあるが如く、各々共通しており、これより1人称代名詞に格の相違はあるけれども、この部分は na me taṃ と校訂されるべきであろう。193^d・194^d の uda- は Dhp, G Dhp と同一であるが、Uvのみが mahā- と、異なっている。S 194^e の praññassa について、対偈となっている前偈と比較すれば、ここは pāpassa に対置するものであり、又パラレルからも指示される故、praññassa ではなくRの校訂の如く puññassa が採用されるべきである。

198・199 (XII—4・5)

198. sa ce *bhāresi* āttānaṃ /
kaṃso upahator iva /
jātī maraṇa-samsāraṃ /
ciraṃ praccanutohisi //

199. na cen *māresi* āttānaṃ /
kaṃso anupahatoriva /
esa prātto'si nibbānaṃ /
sāraṃbhā te na vijjati //

P : (198) Uv XXVI—4 (199) Dhṃ 134, Uv XXVI—5

P₂ : (198) ab) cf. Dhṃ 134^{ab}, Uv XXV—5^{ab} c) Sn 729^a

(199) ab) cf. Uv XXVI—4^{ab}

このテキストのように 2 偈を対偈とするのは Uv のみである。

S 198^a *bhāresi*, 199^a *māresi* は共に R では *iresi* である。この両偈の ab 句は完全な対句であり、S のように両偈の動詞に変化があるのは不合理である。S でも解釈は可能ではあるが、Uv は両句共 *irayasi*, Dhṃ は *eresi* となり共に *√ir* の caus. を指示しており、R が支持される。しかし *i-* が短音である点は問題である。尚、水野弘元博士は 199^a を *no cen m'āresi* と解されているがこれにも疑問は残る (前掲書^{p139})。S 198^c の *jāti maraṇa-* は *jāti-maraṇa-* の方が良い。S 198^d *praccanutohisi*, R 199^d *pradunubhohisi* について、Uv は *anubhaviṣyasi* と語根 *anu√bhū* を示している。これらの語形より考察すると *prati-anu√bhū* が想起されるが、この Pāli 形が *pacanubhoti* であるという点より、この語は *praccanubhohisi* と校訂されるべきではないかと思われる。R 200^c の *si* は 'si と校訂されるべきである。

201 (XII—7)

yathā daṇḍena gopālo /
gāvo rakṣati *mārganāṃ* /
evaṃ rakkhatha āttānaṃ /
khaṇo vo mā upaccagaṃ /
khaṇātītā hi śocanti /
nirayamhi samappitā //

P, P₁ : none

P₂ : a) Dhṃ 135^a, Uv I—17^a, cd) Th 653^{cd} cf) Uv V—17^{a-d}, Dhṃ 315^{e-f}, Th 1005^{e-f}

d) J I^{p13d}, d—f) Uv III—14^{d-f}, G Dhṃ 131^{b-d}, Th 403^{b-d}, Thī 5^{b-d}, Sn 333^{d-f}, AN IV^{p228b-d}

この偈の c—f はこのテキスト 234^{e-f} にあり、234^{a-f} の全体は Dhṃ 315 等に全同の偈が存在する。この偈の a・b 句は前偈 (S 200, R 201) の a・b 句と対句となっており、この偈の構成は他所には見られない独自の偈と言える。

202 (XII—7)

yathā daṇḍena gopālo
gāvo rakṣati *śāmināṃ*
evaṃ rakkhatha āttānaṃ
khaṇo vo mā upaccagga
khaṇātītā **hi** socanti
nirayamhi samappitā.

人文学論集

S^b mārṅanāṃ, R^b sāmināṃ は、対応句未確認の故、又意味上から両者共に訳出可能な故に決定し難い。S^d の upaccaggaṃ は一般的理解からは aor. 1 sg. であるが、それでは文法上、問題があり、一方 R^d の -gga は -gg- が不明であるが、aor. 3 sg. に理解できる。パラレルからは aor. 3 sg. が指示されており、その点より R が支持されるが語形的には問題を残す。但し、S 234^d では upaccagū という語形が使用されていることに注意。

204 (XII—10)

(欠)

sukhakāmāni bhūtāni /
yo daṇḍena na vihiṃsati /
āttano sukham eṣāṇo /
precca so labhate sukhaṃ //

P : Dhp 132, Uv XXX—4

P₂ : a—d) Ud ¹²°—f

同一写本に依ったにも拘らず、Rにこの偈が存在しない。203とこの偈とは対であり、パラレルも同一形式で2偈共存在する (Dhp 131・132, Uv XXX—3・4)。写本を実際に見て結論付けなければならぬが、Rの手落ちであろう。前偈とこの偈の相違はただ前偈 d 句の na 否定辞がこの偈では b 句にあるとといっただけのもので、他は全く同一であり、そのことが原因となったのか。

205 (XII—11)

205 (XII—10)

na tāḍayatha pāpake[12a] mitre /
na tajetha puruṣādhamē /
tajetha prāñña-medhāvī /
tajetha puruṣottame /
tārise tajamānassa /
śreyo hoti na pāpiyo //

na bhajetha pāpake mitre
na bhajetha puruṣādhamē
bhajetha prāñña-medhavi
bhajetha puruṣottame
tārise bhajamānassa
śreyo hoti na pāpiyo.

P, P₁ : none

P₂ : abd) Dhp 78^{abd}, Uv XXV—3^{abd} ef) Dhp 76^{ef}, Uv XXVIII—7^{ef}, G Dhp 231^{ef} f) Th 993^f

S^{a-d} の tajetha (a 句のみ tāḍayatha) は R ではすべて bhajetha となっている。tajetha では訳出できず、パラレルからは R の bhajetha が支持される。同様に S^o の tajamānassa も R bhaja- が適切である。c 句の prāñña-medhāvī は Dhp で mitte kalyāṇe, Uv でも mitram kalyāṇam とすべてのパラレルと異なり、この表現はこのテキストのみである。

211 (XII—17)

apuññalābho ca gatī ca pāpiko /
bhītassa bhītāya ratī pi appikā /
rājāpi daṇḍaṃ garukaṃ praṇeti /
kāyassa teṣā nirayaṃ upeti //

P : Uv IV—15

P₂ : abc) Dhṃ 310^{abc}

Uv (IV—15) には二つの偈が存在するが、この両偈は特に c・d 句が相違しており、このテキストはその一方に全同している。

S^d の teṣā について、これは Uv の bhedād に相当していることから、意味の上からも R の bhedā が適切である。

211 (XII—16)

apuñña-lābho ca gatī ca pāpiko
bhītassa bhītāya ratīpi appikā
rājā pi daṇḍaṃ garukaṃ praṇeti
kāyassa bhedā nirayaṃ upeti.

212 (XII—18)

saṃmyatā sugatiṃ yānti /
doggaṭṭhiṃ yānti asaṃmyatā /
māssa viśrāmaṃ āpādi /
iti viññu samaṃ care //

212 (XII—17)

saṃyattā sugatiṃ yānti
doggaṭṭhiṃ yānti asaṃmyatā
māssu viśśāsaṃ āpādi
iti bindu samaṃ care.

この偈にパラレルは存在しない。S^e māssa viśrāmaṃ āpādi, R^e māssu viśśāsaṃ āpādi について吟味する。この句に類似する 272^e (R 273^e) のパラレル Dhṃ 272^e の PTS 版では bhikkhu viśśāsaṃ āpādi, Uv では bhikkhu viśvāsaṃ āpādyed とあるが、その校訂では意味上に問題がある。これについて R. C. Childers (DICTIONARY OF THE PALI LANGUAGE, 1956) はこの句を viśśāsa-m'āpādi と解し、禁止 mā を置く。水野博士も同様に viśśāsa-māpādi (Dhṃ), viśvāsa-māpādyed (Uv) とする (前掲書 p. 196・197), この句と対応句を比較すると māssa, māssu のところが bhikkhu (bhikkhu) となっている故、誤写とも考えられないことはないが、両校訂本共に māssa- と表記されていることから、これに従うべきであろう。R の assu は √as opt. 3 sg. か √śru aor. 3 sg. と解せるが、ここでは共に不適當であり、S の如く代名詞 assa と解すべきであろうが、これにも問題は残る。S^d viññu, R^d bindu は、bindu では意味をなさず、S の方が適切である。尚、iti のこのテキスト中における用例は ti とほぼ同数である。

〔訳〕 よく制御された人々は善処に趣く。制御されていない人々は悪処に趣く。

怠ってはならない、と智者は正しく行じるべきである。

213 (XII—19)

mā kuñjara nāśamāsita (?) /

213 (XII—18)

mā kuñjara-nāgam āsīd (!)

dukkho kuñjara nāśasammedo /
na hi nāśahatassa kuñjara /
sumatī hoti ito paraṃ yato //

dukkho kuñjara-nāga-sammādo
na hi nāga-hatassa kuñjara
sugatī hoti ito paraṃ yato.

P—P₂: none

P₃: J V P^o336, Vin II P^o195

上記の如く新しくパラレルが見出された故に、それらと比較してこの偈を考察する。

S^a の kuñjara は P₃ でも voc. で、R の如き cpd. の校訂は不適當である。S^a の nāśamāsita はテキストにも? が付されているように問題がある。nāśa は P₃ から nāga とすべきで、これは S^{b,c} も同様である。āsita は √ās の pp. であるがこの句では不適當である。P₃ では āsado とあり、ā/sad aor. 2 sg. が指示される。R の āsid は ā/sad からの語であろうが、これが何形であるのかこの語形からは確定しえない。今、仮に āside に対応するものと見ると opt. 2 sg. と、又 āsida とすれば imper. 2 sg. と解せるが、S との比較により -ta と末尾に母音 a が存在していることを考慮に入れれば、R の āsid は āsida だとの可能性もあり、imper. を想起させる。しかし、P₃ の āsado が aor. を示唆していることから、āsid も aor. であるかも知れない。いずれにしても、この語は ā/sad 2 sg. であることだけは確かであろう。b 句の -sammādo は P₃ では -āsado となっているが、ここでの語形を採用するなら、sam√sad が語根となる。しかし、これでは意味上問題が残る。このテキストにおける m⇌s の混乱を考え合すなら、nāga-sammādo を nāgamasado と読めないこともない。S^d の sumatī は P₃ より R の如く sugatī と読むべきである。

この偈は P₃ によると、酔象を仏陀が調伏する際の物語であり、それは kuñjara が酒に酔わされて仏陀の近くに暴走する場面で、仏陀が kuñjara を諭した時の偈である。Nāga は仏陀自身の呼称であると解される。このことを考慮して訳すと以下の通りである。

[訳] クンジャラよ、ナーガ(仏陀)に近づくな。クンジャラよ、ナーガに近づけば苦が生じる。クンジャラよ、ナーガを殺せば、これより以後に善処はない。

214 (XII—20)

girikumbha-vicāriṇaṃ yathā /
sihaṃ parvatapaṭṭhigocaraṃ /
nara viraṃ apeta bheravaṃ /
mā himsīttha anmavi-kramaṃ //

214 (XII—19)

gi[XX] kuvicāriṇaṃ yathā
sihaṃ parvata paṭṭhigocaraṃ
nara-viraṃ apeta bheravaṃ
mā himsīttha anoma-nikramaṃ

この偈にはパラレルが存在しないため、問題を含むが、以下において吟味する。

S^a の girikumbha- の部分は、R に依れば ri, bha が gi……ku- の間に挿入されると指摘されている。この4音節の子音は両方共に同じ音を採用しているのが順序に異なりが見られる。

ここでは語形を挙げている S に便宜上従う。R^b の parvata, R^c の apeta は各々 S の如く cpd. にすべきであろう。b 句の -paṭṭhi- は skt. prastha-in のプラークリット形と推定される。R^d の himṣittha は himsittha (√hims) の単なる誤植であろう。S^d -vikramaṃ, R^d -nikramaṃ は共に解釈できるが S の方がより適確ではないか。この相違は 276° (R 277°) にも見られる。

〔訳〕 山中を放浪し、山の高原に住む獅子のように、恐怖を離れ、大変勇猛である偉大な人を害してはならない。

218・219 (XIII—3・4)

218. yo tu buddhañ ca dhammañ ca / saṅghaṃ ca śaraṇaṃ gato / catvāri ca ayirasaccāni / yathābhūtāni paśṣati // 219. etaṃ ve śaraṇaṃ khemmaṃ / etaṃ śaraṇaṃ uttamaṃ / etaṃ śaraṇaṃ āgamma / sabbadukkhā pramuccati //	yo tu Buddhañ ca Dhammañ ca Saṅghaṃ ca śaraṇaṃ gato catvāri ca ayira-saccāni yathā-bhūtāni paśṣati. etaṃ ve śaraṇaṃ khemmaṃ etaṃ śaraṇaṃ uttamaṃ etaṃ śaraṇaṃ āgamma sabba-dukkhā pramuccati.
---	--

P : (218) Dhṃ 190, Uv XXVII—33

(219) Dhṃ 192, Uv XXVII—35

P₂ : (218) c) Uv XII—1^a

(219) d) Uv VII—11^f, XIX—11^d, XXIII—25^d, XXVI—27^d, XXVII—32^d, XXIX—39^f

G Dhṃ 250^d

218・219 の 2 連偈に対し、Dhṃ, Uv では 3 連偈となっている。このテキストは Dhṃ, Uv の中間の 1 偈 (Dhṃ 191, Uv XXVII—34) が欠落していることになる。この省略されている偈の内容は四諦各々の説明である。3 偈一連の形式は他所にも存在するにも拘らず、ここは 2 偈のみの連偈としていることは自明の偈として省略したものではないであろうか。これと同様の例は 373・374 偈にも見られる。218^d の yathābhūtāni に対し、パラレルの Dhṃ では sammappaññāya, 他の Pāli 文献では paññāya, Uv では prajñāyā と表現が異なっている。

220—223 (XIII—5~8)

220. gaḍāṃ ce taramāṇānāṃ / jhamaṃ gacchati aṅgado / sabbātā jhamaṃ gacchanti / netre jhmagate sati // 221. evāṃ eva maṇuṣyesu /	gavāṃceta ramāṇānāṃ jhamaṃ gacchati puṃgavo sabbā tā jhamaṃ gacchanti netre jhmagate sati. evāṃ (!) eva maṇuṣyesu
--	---

yo hoti śreṣṭhasaṃmato /
 sa ce adhaṃmaṃ carati /
 prāg eva itarā prajā //
 222. gadāṃ ce taramāṇānāṃ /
 ujjam gacchati puṅgavo /
 sabbātā ujjam gacchanti /
 netre ujjā gate sati //
 223. evāṃ eva maṇuṣyesu /
 yo hoti śreṣṭhasaṃmato /
 sa ceva dhammaṃ carati /
 prāg eva itarā prajā //

yo hoti śreṣṭha saṃmato
 sace vadhaṃ saṃcarati
 prāg eva itarā prajā.
 gavāmceta ramāṇānāṃ
 ujjum gacchati puṅgavo
 sabbā tā ujjum gacchanti
 netre ujjū gate sati.
 evām(!) eva maṇuṣyesu
 yo hoti śreṣṭha saṃmato
 sace vadhaṃ saṃcarati
 prāg eva itarā prajā.

P-P₂: none

P₃: AN II 75・76, J III 111, V 222・242

上記4偈はP₃の各パラレルにも一連の偈として表われている。S, R共にパラレルとの対応がなされておらず、そのためにか両者共混乱している。P₃をもとに校訂を再吟味する。

220偈の S^a gadāṃ ce taramāṇānāṃ, R^a gavāmceta ramāṇānāṃ は P₃ から、gadāṃ より gavāṃ が適切で、以下の校訂はSを採用すべきである。S^b の aṅgado は意味上から不適當で、P₃ からもRの puṅgavo が支持される。S^c sabbātā は P₃ からもR sabbā tāの方が適切である。R^d の jihma gata は cpd. とするSの方が正しい。221 R^b śreṣṭha saṃmato は cpd. とすべきである。S^e の adhaṃmaṃ carati に対し R^e は vadhaṃ saṃcarati とあるが P₃ からSの校訂が支持される。222 偈は220 偈と同じ問題点が見られ、ここではそれらを省略する。S^{b-d} の ujjā はRの ujjūの方がP₃と対応しているが、これはこのテキストにみられる a⇒uの混乱の結果であろう。R^d の ujjū gate は cpd. にすべきである。223 R^e は221 R^eと同じである。尚、220^a, 223^aに見られる evāṃ はこのテキストで4例見出せるが、これは evam の誤りか、独自形なのか。

[訳] (220) もし牛が(道を)横断する時、(先導する)牡牛が曲って歩いたなら、すべての牝牛が曲ってついていく。曲って行く案内者がいる故に。

(221) それと同様に人々の中で、よく尊敬された人が、もし道理に外れたことをするなら、他の人々は何をか況んや。

(222) もし牛が(道を)横断する時、(先導する)牡牛が正しく進むなら、すべての牝牛も正しく道を進むであろう。正しく歩む案内者がいる故に。

(224) それと同様に、人々の中で、よく尊敬された人が、もし正しいことを行なうとしたなら、他の人々も何をか況んやである。

225 (XIII—10)

dhammaṃ care sucaritaṃ /	dhammaṃ care sucaritaṃ
naṃ duccharitaṃ care /	na ṇaṃ(!) duccharitaṃ care
brahmacāri sukhaṃ śeti /	brahmacārī sukhaṃ śeti
asmiṃ loke paramhi ca //	asmiṃ loke paramhi ca.

この偈は c 句の brahmacāri が dhammacāri と異なっただけの同一の偈を224偈に有する。異本等は224偈と全同関係にあり、この偈とは厳密な意味で対応していない。このテキストだけが brahmacāri と dhammacāri とを入れ代えたほとんど同一の偈を有している（尚、225偈のパラレルに関しては S, R の224偈の note を参照）。b 句 naṃ は R の如く na ṇaṃ と訂正すべきである。S° の -cāri は 224° で -cārī となっており、音の長短は統一されるべきである。

228 (XIII—13)

dhammo have rakkhati brahmacāri /	dhammo have rakkhati brahmacārī
dhammo śucinno sukhāya dahāti /	dhammo sucinno sukhāya dah(!)āti
esānuśaṃso dhamme śucinno /	esānuśaṃso dhamme sucinno
na doggaṭiṃ gacchati brahmacāri //	na doggaṭiṃ gacchati brahmācārī.

P : none

P₁ : J I °31, IV °54, 496

P₂ : b) Uv X—3^b, Sn 182^b bc) Uv XXX—7^{bc}, Th 303^{bc} c) Uv XXX—6°

224・225偈の関係と全く同じ関係が227・228偈にも見られる。即ち、両偈は227偈 a・d 句の dhammāri が228偈で brahmacāri に入れ代えられただけの同一の偈である。Dhp には両偈共にパラレルが見出されないが、227偈には Uv XXX—7, Th 303 等の全同パラレルが存在する。

S^a -cāri, R^a -cārī は227偈では各々 S^a -cāri, R^a -cārīṇaṃ と校訂されている。227偈の場合、すべてのパラレルからは sg. acc. が指示されている。-cāri は pl. acc. でパラレルとは異なっているが、写本ではどちらであるのか決定しえない。しかし、S の -cāri は問題であり、S 227^a と統一して -cārī とされるべきである。b 句の dahāti であるが、これはパラレルから Skt. āda-dhāti, pāli dahati が指示される。

232 (XIII—17)

haṃsā va ādiccapathe /	haṃsā va ādicca-pathe
vehāyaṣaṃ yānti iddhiyā /	vehāyaṣaṃ yānti iddhiyā
nīyyanti dhīrā lokamhiṃ /	nīyyānti dhīrā lokamhi
mārasenaṃ pramad ^d hiya //	māra-senaṃ pramad ^d iya,

P : Dhp 175, Uv XVII—2

上記の Dhp, Uv は全同のパラレルと見做せるが、細部の使用単語等に相違が見られる。例を挙げると、先ず b 句で、vehāyasam に対して Dhp は akāse, Uv は akāse とあり、yānti は Dhp, Uv では a 句にあり、iddhiyā は Dhp と同じであるが Uv では jivitendriyaḥ となっている。d 句の mārasenam に対して Uv は同じであるが、Dhp では māram savāhanam となっており、pramaddhiya (R, pramaddiya) は Uv では pramathya と共に pra√mṛd の ger. であるが、Dhp では jetvā と √ji の ger. である。このように内容上同一でありながら各々における語、語順等の相違は通常よく見られることではあるが、これは何を意味しているのだろうか。尚、S^d pramaddhiya, R^d pramaddiya であるが、通常 √mṛd の ger. は R の形を指示している。

247 (XIV—9)

ye sattagaṇḍām paṭhaviṃ vijettā /
rājarīṣayo yajamānā'nupariyasu(?) /
aśśamedham puruṣamedham /
maṃsaāmam(?) vāyu(ja?)-peyaṃ nir-
aggahaṃ /
mettassa [14a] cittassa pṛabhāvitassa /
kalām pi tenānubhavanti ṣoḍaśiṃ /
candra-prabhāṃ tāragaṇā va maddhe //

P : G Dhp 196 · 197

P₁ : AN IV P151

P₃ : It P21 · 22 fg) AN I P215, IV P255 · 258 · 262

S はパラレルとの対応がなされていないためか、便宜上この変則的な偈を 1 偈と解釈している。R は G Dhp の区切り (196, 197) に準拠して 2 偈と解している。但し、G Dhp は各 4 句構成の偈であり、ここでは G Dhp 197^b (diṭṭhe va dharmi uvavaja va muṇo) に相当する句が、欠落しており、7 句より構成された特異な偈と言える。この偈と完全に一致するものは、Brough が指摘するように AN IV P151 とそれ以外に It P21 · 22 G に存在する。It の PTS 版テキストでは a · b · e · f の 4 句を主要句として 1 偈に解釈し、他句 c · d · g をカッコ内に収めて表示している。Si^o (245, 246) も It と同様の校訂がなされているが、B^o (P209) では a—d, e—g の 2 偈に分割されている。つまり同一テキストにおいても校訂者によって相違が生じている。尚、f · g の 2 句のみは P₃ で表記した AN 中で連句として用いられている。又、韻律上からは、a · e · f · g 句がほぼ完全な triṣṭubh である。その意味からは他句 b · c · d が挿入句とも考えられるが、その場合は a 句のみが独立した意味を持たず、意味内容からは不都合である。以上の点から、次のような問題が指摘できるであろう。It のようにカッコに入れる校訂の仕方は韻

247 · 248 (XIV—9 · 10)

247. ye satta śaṇḍām paṃviṃ(=pathaviṃ)vijettā
rāja-riṣayo (!) yajamānānupariya(yu) (?)
aśśamedham puruṣamedham saṃma-
pṛāsaṃ (!) vāyupeyaṃ nirāggadaṃ.

248. mettrassa cittassa subhāvitassa
kalām pi te nānubhavanti ṣoḍaśiṃ
candra-prabhāṃ tāra-gaṇā va sabbe.

律上問題が解消されないし、このような7句構成の偈を2偈に分割することにも問題が残る。この7句は相互に関連した1偈と見做しうる意味内容を有する故に、1偈構成と見るSの校訂も考慮しなければならない。

S^a -gaṇḍām, R^a śaṇḍām はパラレルからはRが支持されるが、satta とは cpd. でなければならない。S^b 'nupariyasu, R^b -anupariyayu について、anupariyayu は anupari/yā の opt. 3 pl. を、'nupariyasu は aor. 3 pl. を想起さすが、後者の場合は通常 -yaṃsu でなければならないであろう。パラレルからは anupariyagā と aor. を指示しているが、これも 3 pl. でなければならないところ 3 sg. と数に不統一が見られる。S^d の maṃsaāmaṃ は理解不可能であるが、R^{cd} の saṃmaṃprāsaṃ はパラレル saṃmāpāsaṃ に対応している。vāyupeyaṃ は vāja-peyyaṃ に相当する語であるのか。S^d nirāggahaṃ, R^d nirāggadaṃ は niraggalaṃ に対応している。S^e prabhāvitassa, R^a subhāvitassa はパラレルからはRが支持される。S^f の tenā-nubhavanti はRの如く te nānu- とすべきである。S^g の maddhe では意味不明で sabbe が適切である。

〔訳〕衆生の群集う土地を征服し、馬祠や人祠、棒祭、ソーマ祭そして無遮会を供養しつつ王仙は遍歴しても、慈しみの心をよく修した人の16分の1にも及ばない。すべての星が月に及ばないが如く。

252 (XIV—14)

yo na hanti na ghātetī /
na jināti (?) na jñāpaye (?) /
metraṃ me sabbabhūtesu /
veraṃ tassa na kena ci //

P : none

P₁ : AN IV ^P151

P₂ : a) Dhp 405^c cd) UV XXXI—42^{cd}, 42 A^{cd}, 42 B^{cd}

P₃ : G Dhp 198, It ^P22

G Dhp, AN, It において、この偈は、このテキストの247偈に連なる偈として存在しているが、このテキストでは、その間に数偈が挿入されており連続していない。

S^b jñāpaye は √jñā を想起させるが文脈上不適當である。R jāyaye をこのテキストにおける p ⇌ y の混乱の結果と考えれば jāpaye となり、これはパラレルより支持される。S^c metraṃ me, R^e mettraṃ se は AN 等では mettamaṃso, Uv では maitraṃ sa となっている。パラレルより見れば、文字の上で se とするRが支持されるが、e には問題が残る。今eをoの誤りと解すれば Uv の如く読解可能とはなるが、両者共にeを指示しているだけに問題である。

[訳] 殺さず、殺させず、征服せず征服させず、すべての生き物に対して慈しみがあるなら、誰からも怨まれることはない。

260 (XV—22)

jinṇam ca driṣṭā dukkhitam ca vyādhitam /
pretañ ca driṣṭā /
na cirassa mānavo /
saṃvego tiṇṇo viśūlo ajāyatha /
acchejji dhiro gr̥habaṃdhanāni //

P, P₁: none

P₂: a) Th 73^a, J I P¹³⁹^a e) Uv I—27^e

Sは5句構成で、Rはそのb・c句を1句と見做し4句構成とする。韻律上ほぼ完全な jagati となっているRの校訂が適切である。異本と比較して、これにのみ定型化された四門出遊伝説が設定されている点は注意すべきであろう。

S^a *jinṇam*, R^a *jihmaṃ* はパラレルよりSが支持される。a・b句の *driṣṭā* は特殊形であるが、この語形の用例はここだけであり、他の箇所では *dr̥ṣṭ-* となっている。S^d *saṃvegotiṇṇo*, R^e *saṃvego tippe* であるが、これはRのように分離すべきである。tiṇṇo は √ti の pp. を、tippe は *tippa* を各々想起させるが、前者は意味上疑問点があり、後者は *tippe* の e を S の如く o とすれば *tippo* として i と長音であることを除けば解釈可能である。S の *viśūlo*, R の *vipulo* であるが、*viśūlo* では意味がとれない。但し、これらについてはパラレルが存在しないため確定的とは言えない。S^o, R^d の *acchejji* は √chid の aor. 3 sg. であるがパラレルの Uv では *jahau* と √hā の pf. 3 sg. となっている。S *gr̥habaṃdhanāni*, R *gr̥hi-vasunāni* はパラレルよりSが支持される。

[訳] 年老いた人、苦しんでいる人、病んでいる人を見て、そして死者を見て、長い間若くはない（という）激しく広大な感動が起って、賢者は（俗）家の束縛を断ち切った。

（未完）

[共同研究者] 南 清隆

※ R版を逸速く入手できたのは、小野田俊蔵氏を介し湯山明博士の御好意に依るものである。末尾ながら、ここで両氏に深く感謝する。

(20・8・1981)